

体験することにより心を育てる道徳教育の検討

学籍番号 169970

氏名 伊藤 清隆

大学院主指導教員 森田 英嗣

1. はじめに

1-1 道徳教育改善の必要性

平成30年度より、小学校において、これまで行われてきた「道徳の時間」は「特別の教科道徳」として教科化される。学習指導要領の改正に向けて、これまでの「道徳の時間」は批判的に検討され、「考え、議論する道徳」へのパラダイム転換が求められるようになった。

『『特別の教科 道徳』の指導方法・評価について（報告）』（道徳教育にかかる評価等の在り方に関する専門家会議，2016年7月；p.6）では、質の高い道徳の指導方法として、「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」、「問題解決的な学習」、「道徳的行為に関する体験的な学習」が挙げられている。これは、従来の指導方法に加えて、「考える」学習と「体験する」学習を授業に組み込むということであると捉えることができる。本報告では、体験的学習に焦点を当てつつ、考える学習を取り入れた道徳の授業づくりとその効果について検討する。

1-2 道徳教育における体験的学習

道徳教育における体験的学習として、ロールプレイ、モラルスキルトレーニング、挨拶を実際に行うことを授業に取り入れた。ロールプレイは役割演技とも呼ばれ、その名の通り、ある状況設定で登場人物の役を演技して行う心理劇である。モラルスキルトレーニングとは、ソーシャルスキルトレーニングを道徳的場面に適用したもので、道徳的行動をスキルとして教えるというものである（林，2013；p.13）。

1-3 本研究の目的

本研究の目的は、道徳の授業に体験的学習を取り入れて、児童たちの「道徳性の成長」について、その効果を検証することであった。本研究では、ロールプレイ、スキルトレーニングなどにより児童たちに体験させることに加えて、対話的に考えることを意識して取り入れた。体験を単なる個人の体験として終わらせず、他の児童と共有したり、振り返ってその意味を考えたりして、深めることができると考えたためであった。

2. 基本学校実習 I

体験的学習として、ロールプレイとスキルトレーニングを取り入れた授業を実施して、親切や思いやりの心を育てることができたかを検証した。その結果、相手の気持ちを理解したり、相手へ配慮した言葉かけができたりした児童は多かった。基本学校実習 I では、具体的な道徳的行為を扱わなかった。具体的な道徳的行為にスキルとして扱い、児童たちに理解させる、「道徳性」を適切に評価することが課題として残された。

3. 基本学校実習 II

謝るという行為をスキルトレーニングやロールプレイにより体験させることにより、児童たちに誠実に謝ることの大切さや難しさに気づかせて、正直な心を育てることであった。その結果、多くの児童たちは謝られるときの相手の気持ちや謝るときの適切な態度を理解した。また、授業を受けて、今後、謝るべきときには、適切な態度で素直に謝ろうと思った児童は過半数であった。スキルトレーニングで学んだことを実際の場面で活用できるようにするために、授業の中でどのような工夫を凝らすかが課題として残された。

4. 発展課題実習 I

実際に挨拶することを通して、挨拶の大切さについて実感し、挨拶の意味や効果について多面的・多角的に考え、自分から挨拶しようという態度を育てることを目的とした。結果として、挨拶の体験から、相手の反応を感じ取り、挨拶について多面的・多角的に考えることができた児童は多かった。また、多くの児童には挨拶の習慣が身に付いていた。アンケートの質問の統一、ワークシートの改善をして、より適切な評価をすることが課題として残された。

5. 発展課題実習 II

発展課題実習 I の授業展開、評価方法などを改善して、実際に挨拶することを通して、挨拶の大切さについて実感し、挨拶の意味や効果について考え、自分から挨拶しようという態度を育てるといった目的の達成を目指した。アンケートの質問の統一、ワークシートの改善に加えて、児童の行動観察をしたことにより、客観的な評価を行うことができた。道徳の授業に体験的学習を取り入れることで、児童たちの道徳的価値に対する捉え方が変化し、その意義を多面的・多角的に考える機会を設定することができた。体験後の対話的交流により、児童たちのワークシートの記述は多様なものとなった。また、実際の行動にも変化が現れ、体験した道徳的行為が習慣化されることが示唆された。本研究により、ねらいとする道徳的価値の大切さを児童が実感し、児童の「道徳性の成長」に効果がある可能性が示された。今後、目的とする道徳的価値にあわせて、どのような体験を用意すべきか、体験したことの理解を深めるためにどう工夫すべきかを探究していきたい。